埋文センターニュース

第14号
2001.10.1
津市埋蔵文化財センター

リニューアルした展示室

安濃津をゆく その① 大谷・長岡・見当山丘陵の遺跡

東に伊勢湾を臨み、西に長谷山を仰ぐ津市。山から海に向かって延びるいくつかの低丘陵や高茶屋周辺の台地。そして志登茂川・安濃川・岩田川・雲出川の各河川沿いにひろがる沖積地とその下流の海岸平野。約101㎢の市域には様々な条件の土地があり、私たちの祖先が地表に残した営みのあとである遺跡が、800箇所以上も見つかっています。

今回から5回にわたり、津市と近辺の遺跡の数々を、まとまった区域ごとに紹介したいと思います。今回はその第1回。安濃川と志登茂川に挟まれ、芸濃町から津駅近くまで細長く延びる丘陵上を歩いてみましょう。

2,000年前の住宅団地

なんと言ってもこの丘陵、ここ30年間の景観が津市内で最も変った場所ではないでしょうか。雑木が生い茂る里山であったこの低丘陵も今やその多くが宅地化されました。

実はここには、2,000年前の"弥生の住宅団地"ともいえる大規模な集落跡(長遺跡)があり、総計200棟以上の竪穴住居跡が丘陵頂上から斜面にかけて階段状に密集していることがわかりました。その様はまさに現代の住宅団地を彷彿とさせるもので、人が住む場所の選択には、昔も今も変らぬ共通性があるものかと感心させられます。

上空から見た長遺跡*(上)と階段状の竪穴住居跡

遺跡分布図

大城遺跡の住居跡**

ただ、長遺跡の立地する丘陵上は決して生活に便利な場所とは言えません。北西斜面に立地することによる日当たりの弱さや風当たりの強さ、傾斜地ゆえの住居構築用の平坦面確保や丘陵地ゆえの生活水確保の困難さなど、日常生活のマイナス面を覚悟の上でこうした場所に集落を築いています。このように平地と高度差を持った場所に営まれる集落を一般的に“高地性集落”と呼んでいます。南側に隣接し同時期に営まれる山籠遺跡も含めて大集落であったと考えられますが、弥生時代中期後半という限定された時期に営まれる両遺跡は、この頃に起こった全国的な争乱(倭国大乱)の中で発生した、自衛的性格を持った集落と位置付けることもできます。

さて、集落跡とともに遺跡の代表格である墓については、こうした大集落に対応するようなものがほとんど確認されていません。安濃町倉谷遺跡で少し時期の早い台状墓と埋葬施設が見つかっている程度です。丘陵上のどこかにまだひっそりと埋まっているのか、それとも存在しないのか、今のところは未知のままです。

拡散する集落

時代がやや下がって弥生時代も後期になると、集落は丘陵上から丘陵裾へ移動する傾向にあります。南側の丘陵裾を流れる美濃屋川周辺に小規模な集落が点在するようになり、前代のような突出した規模の集落は見当たりません。丘陵上の集落はほぼなくなります。唯一、安濃町大城遺跡に住居跡がいくつかありますが、これらは近接して造営された方形台状墓とセット関係にある祭祀を執り行う施設との見方が強く、純粋な意味での集落跡とは言えません。この住居跡のひとつからは、表面に「奉」の文字とされる線刻が施された土器も出土しており、日本での文字の使用の起源に関わる資料として注目を集めました。

さて、弥生時代後期の集落は、大規模な中期集落に比べて規模の小さなものへと移行していくことが従来から指摘されています。先に述べた丘陵裾部への集落の移動も、「分村」と捉えられる集落の拡散現象であり、河川流域低地部での農業生産力の向上(水田域の拡大)がその基礎となっていると考えられます。

古墳のかたち、さまざま

津市域で最も早い時期の古墳は、岩田川左岸の片田志袋町にある坂本山古墳群で4世紀末のものが確認されています。しかし、本丘陵上ではさほど古い時期の古墳は造られず、古墳時代も半ばを過ぎた5世紀後半になってようやく造られはじめます。ここでの古墳の特徴をひとことで表わすと、数そのものは少なく、単独で存在するものが多いことに加え墳形や構造にはいろいろなバリエーションを含んでいることです。

丘陵上に初めて造られた門脇北古墳は、直径17m余りの円墳で周溝を持ち、墳丘中央部

倉谷遺跡の方形台状墓と墓坑**

上空から見た大城遺跡**

門脇北古墳の埴輪列*(上)と家形埴輪

西岡古墳の墳丘*(上)と鉄製武器・農工具

に木製の棺を直接葬った埋葬施設と墳丘を巡る埴輪列を確認しました。埴輪は円筒埴輪のほか、器材埴輪や人物埴輪などがあります。

次に5世紀末から6世紀初頭にかけての頃、丘陵頂部の自然地形を利用した形で西岡古墳が造られます。この古墳は方墳で頂上の尾根を切るような形で溝が掘られ、そこからは鉄製農工具がまとまって出土しました。墳頂部で出土した剣とあわせ、こうした供献品は古墳に葬られた人物の性格を示すといわれます。丘陵頂部での古墳立地と武器や農工具の出土を考え合わせると、この地域を治めていた長の姿が想像できるのではないでしょうか。

同時期のものとしては、安濃町堂山古墳群や大城古墳群など群構成をとる古墳群の造営が始まります。前者には本丘陵では数少ない前方後円墳も含まれます。

このほかには、次章で詳述する君ヶ口古墳が6世紀前半に築かれます。その特異な埋葬施設は全国的に見ても数少なく、従来の古墳被葬者とは系統の異なる氏族の存在が指摘されています。また、さらに時期が下がり7世紀になると、丘陵の最先端部に鳥居古墳が出現します。古墳の石室内からは、金銅製押出仏等の仏教関連遺物も出土しています。なお、調査後は姿を消してしまう遺跡がほとんどの

移築された鳥居古墳の石室・石棺

なか、鳥居古墳の石室と石棺は移築され、三重県立博物館の中庭で見ることができます。

兵(つわもの)どもが夢のあと

時代は一気に飛んで中世の世。津とその周辺地域には多くの城館が築かれました。これは安濃郡と奄芸(あんき)郡を領有する長野氏と一志郡以南を領有する国司(こくし)北畠(きたばたけ)氏の争いの構図を反映したものです。本丘陵上に築かれた中世城館は、いずれも室町時代～戦国時代にかけてのもので、永禄(えいろく)年間に北畠氏の軍門に下った長野氏の臣下細野氏の居城安濃城が周辺地域でも最大級の規模を誇っています。

丘陵先端部近くに隣接する3つの城はいずれも発掘調査が行われ、その構造が明らかにされています。

渋見(しぶみ)城は長野氏の与力乙部氏が築いたといわれる城です。南に登城路を設け、中央に主郭(しゅかく)、周囲(特に北側)に大規模な空堀を巡らせる構造に、織田信長の伊勢侵攻を念頭においた強固な防禦(ぼうぎょ)姿勢を垣間見ることができます。

峯治(みねじ)城も渋見城同様強固な守りを意図した郭(くるわ)構造となっています。峯治城で特徴的なのはその出土遺物に土師器(はじき)の鍋釜(なべかま)類の多いことです。これらはいずれも使用されたことが明らかで煤(すす)の残るものも多くあります。戦時のみの城ではなく、平時の生活を伴った城であることがわかります。

上津部田(こうづべた)城は渋見・峯治の両城に比べると規模の小さなものですが、方形に土塁(どるい)を巡らせ、北辺に門のある虎口(こぐち)を持つ構造となっています。発掘調査後の道路建設でその一部が削られたものの、その後復元され、郭とその周囲は歴史公園として整備されています。

(中村)

発掘調査中の渋見城跡

発掘調査中の峯治城跡

復元前の上津部田城址

・:三重県埋蔵文化財センター提供写真
・・:安濃町教育委員会提供写真

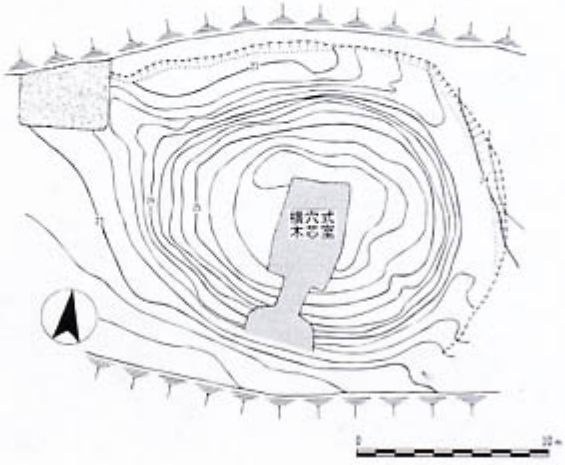
【主要参考文献】
『日本の古代遺跡52 三重』保育社 1996
『長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2000
『大塚西山遺跡・倉谷方形台状墓発掘調査報告』安濃町教育委員会 2001
『大城遺跡発掘調査報告』安濃町教育委員会 1998
『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976
『定本・三重県の城』郷土出版社 1991

遺跡紹介⑬　君ケ口古墳

君ケ口古墳は、長岡町の丘陵部に築かれた6世紀前半の前方後円墳です。全長は24mで、墳丘の東側から北側にかけて浅い周溝が巡っていました。近辺に同じ時期の古墳はなく、独立性の高い古墳といえます。昭和48年に住宅団地の造成にともなって発掘調査が行われました。

埋葬施設は横穴式木芯室とよばれる特異なもので、横穴式石室が石積みによって墓室を構築するのに対して、横穴式木芯室は石材の代わりに木材が使用されています。君ケ口古墳の場合は、長方形の土坑に4本の支柱を立てて、梁を渡した骨組みに板材を並べて玄室を造り、玄室入口と前庭部にも各2本の支柱を立てて、板材で羨道を造っています。平面及び空間は、まさに横穴式石室と同様であったと推定されます。玄室の床面には、こぶし大の川原石が敷きつめられており、排水溝は玄室の中央から羨道と前庭部を通って墳丘の端部まで達しています。

玄室内には、土師器、須恵器のほか、鉄刀、刀子、鉄鏃などの鉄製品、管玉、ガラス玉、棗玉、耳環などの装身具が副葬されていました。副葬品の配置状況から、3体が埋葬されたと考えられますが、遺体が棺に入れられていたかどうかは不明です。



墳丘測量図（1：400）

このような横穴式木芯室は三重県のほかに静岡県、岐阜県、滋賀県、大阪府、京都府、兵庫県、岡山県などにも分布しており、現在までに70基あまりの存在が確認されています。三重県では君ケ口古墳のほかに、伊勢市の南山古墳と昼河古墳群で確認されており、伊勢市の東部に集中しているようです。このうち昼河古墳群の4基は、いずれも遺体を安置した後に室内に火がかけられていましたが、全国で確認されている70基あまりのうち室内に火がかけられているものは3分の1ほどで、室内に火をかけることが必ずしも一般的であったとはいえないようです。横穴式木芯室は6世紀前半から7世紀中頃にかけて築造されましたが、君ケ口古墳の横穴式木芯室は現在のところ国内で最も早く築造されたものといえます。被葬者については渡来系氏族とする説など様々な説があります。　(村木)

横穴式木芯室（北から）

遺物紹介⑬　鳥居古墳出土押出仏・塼仏

今回は、津市鳥居町の鳥居古墳から出土した押出仏と塼仏を紹介します。かつては「愛宕山古墳」と呼ばれた鳥居古墳は、横穴式石室に刳抜式の家形石棺をもつ古墳であったことや、石棺の脇から押出仏や塼仏が多数出土したことで知られる古墳です。昭和38年に三重県立博物館によって発掘調査が行われ、その際に出土した遺物は、「安濃津をゆく」で紹介した石室・石棺とともに、三重県立博物館に保管されています。

押出仏と塼仏は、原料や作り方は異なりますが、ともに型から作られた浮彫りの仏像です。押出仏は銅で鋳造した仏像の凸型に銅板をかぶせ、鎚や木鑿で叩いて型取りしたもので、塼仏は仏像を彫り刻んだ凹型で型抜きした粘土を焼き締めたものです。これらは7世紀後半から8世紀にかけて盛んに作られ、厨子に納めて礼拝像としたり、寺院の内壁装飾として用いられたりしていました。例えば、名張市夏見廃寺や嬉野町天花寺廃寺などの古代寺院跡では、多数の塼仏が出土しています。

鳥居古墳の押出仏は、土の塊の中に長く埋もれていたため、銅板のほとんどが腐蝕していましたが、もとは厨子に納められていたものと考えられています。そのなかでも銅板が舟形に切り取られた一光三尊像(1)には、金メッキがよく残っていて、今も往時を彷彿とさせる輝きを放っています。この押出仏は、中央に唐招提寺や東京国立博物館が所蔵する押出仏と同じ型の如来立像が、その向かって右側には当麻寺や知恩院、東京国立博物館が所蔵する押出仏と同じ型の菩薩立像が使われていて、複数の型を組み合わせてこの一枚が作られていたことがわかっています。

また、菩薩立像(2)は、その型が富本銭の鋳造で知られる奈良県飛鳥池遺跡から出土した仏像の鋳型で作られていた可能性が高いことが判明し、これらの生産と飛鳥池遺跡との関連も注目されています。

ところで、鳥居古墳は7世紀前半に造られたと考えられていますが、押出仏は7世紀末から8世紀前半、吉祥天立像塼仏(4)は8世紀後半に製作されたものと考えられています。古墳の築造年代よりも押出仏・塼仏の製作年代の方が新しいことから、これらは後から石室に納められたと推察されています。

首長層の権威の象徴が古墳の築造から寺院建立へと移りゆくなかで、鳥居古墳の押出仏と塼仏は、この地域への仏教文化の浸透を示す貴重な資料です。しかし、これらの製作年代と古墳の築造時期について、「追納説」を疑問とする意見もあり、古墳の数百m東にある四天王寺などとの関連も含めて、今後の調査研究の進展が期待されています。　(藤田)

一光三尊像押出仏　タテ30.1cm

菩薩立像押出仏　タテ14.9cm

如来坐像押出仏　タテ14.3cm

吉祥天立像塼仏　タテ20.7cm

写真提供：三重県立博物館

この春！展示がリニューアル!!

近年、小学校の遠足や市政教室などの施設見学が急増してきたことから、この春、事務室に設けていた展示を大幅に改装しました。

従来の津市の代表的な遺跡からの出土品や遺構写真に加えて、特に今回は「よくみて・くらべて」をコンセプトに、ゲーム感覚で出土品を観察してもらえるよう、ほぼ実物大の銅鐸パズルや小学生向けのワークシートなどを作成しました。

また、埋蔵文化財センターでは、展示の見学だけではなく、施設や室内作業等の見学も随時受付けています。遺跡が発掘調査されてから、整理作業や調査研究を経て展示にいたるまでの過程を是非一度ご覧ください。

これらを通して、みなさんに地中深くに埋もれた津市の歴史や埋蔵文化財保護についての理解を深めていただければと思っています。

見学時間　平日 8：30～17：00

（土・日・祝日、年末年始は休み）

お問い合わせ☎059-229-0210

銅鐸パズルにチャレンジ

ワークシートで大いに悩む

〈刊行物のご案内〉

津市の遺跡シリーズ①　津市の縄文時代

津市の遺跡シリーズ第１弾は「津市の縄文時代」です。津市にはどれぐらい前から人が住んでいたの？　津市にはどんな縄文遺跡があるの？　そんな疑問に答えてくれる一枚です。埋蔵文化財センターと市教育委員会文化課で無料で配布しています。

《編集後記》

今年度の上半期は発掘調査はなかったのですが、普及業務や発掘調査報告書の作成、資料調査に追われて過ぎていきました。まさに光陰矢の如し…。

さて、今号から新コーナー「安濃津をゆく」がスタートします。これからも水系・丘陵単位の遺跡紹介を連載していきますのでご期待下さい。　(編集子)

発　行　日：２００１．１０．１
編集・発行：津市埋蔵文化財センター
〒514-0058
三重県津市安東町1225
TEL　059－229－0210
FAX　059－229－4601
印　　刷：共立印刷株式会社